百済寺の文化財

愛東町文化財
専門委員長　川上敏雄

《百済寺略歴》

百済寺がいつ建てられたか誰が建てたのか明らかではありません。この地方鈴鹿山脈が湖東平野にその山裾を接する平野部を開拓して豊かな水田地帯を作ったのは西暦600年より以前に朝鮮半島の各地から渡来した人々によるものでした。その中でこの地に渡来して開拓をなしとげたのは平群氏を中心とした人々でありました。平群氏は現在愛知郡湖東町平柳地区に本據を置いて山裾の困難な開拓を進め「愛知郡養父(やぶ)郷」を作り多くの水田を造り上げました。

これ等の水田に取入れる水は近くの山から流れ出る谷川の水でした。人々は谷川の水を大切に使いすこしでも多くの水が流れ出してくることを神佛にお祈りをいたしました。谷川の中でも南川は養父郷の水田をうるおす一番大きな川でした。この南川の水を祀る場所が現在百済寺丁集落の氏神岩上神社の御神体の大きな岩のほとりであったと思われます。

この大石の近くに見事な杉の大木があって縄文杉であったと思われます。この杉の木を佛として水と共に身の幸を祈ったのが百済寺の始まりでした。この頃百済(くだら)國の僧道欣が平群氏の許に来ていました。道欣という百済の僧は推古天皇17年（609）４月に肥後國葦北津に着いてそのまま日本に留まって大和國元興寺に入り後平群氏の許に来ました。道欣と平群氏がお互に交友のあった事だと思われます。この例から平群氏も百済國からの渡来した一族であったと思われます。この機会に大木杉の祀場に小さな寺を建立して道欣を住職とした事が百済寺の創建で、寺名を「くだら寺」と呼ぶようになりました。この寺の創建に努力した人々が百済國からの渡来の人が養父郷に多かったから「くだら寺」と名づけて百済の國をしのぶお寺として尊敬したのでした。長い間に本堂を山の中に建て替えて人々の祈りの寺として信仰しました。

西暦1000年の頃に佛教は天台宗の最盛期を迎えました。この頃愛知郡内の水田五百町歩が日吉社領となり天台宗の領する土地となりました。愛知郡内の豪族達は郡内の米が他に持ち出される事を心配して少しでも多く郡内に残す方法を協議して、郡内に天台宗の寺院を造る事になりました。当時の郡の中心は秦氏で依智(えち)秦氏は常に郡の大領として郡内を統治していました。依智秦氏を中心として「くだら寺」を天台宗の大寺にする事になりました。小さな寺くだら寺は急に天台宗の大寺になる事になりました。養父郷を二分して百済寺郷と押立郷にしました。百済寺郷の土地と村々は百済寺の中に入ってしまいました。百済寺郷は現在百済寺甲・乙・丙・丁・戊の５集落と旧篭村からなっていました。

小さな寺から急に大寺になった百済寺には多くの高僧や修業僧や学生方と呼ばれる僧兵が多く住むことになって室町時代には三百坊と呼ばれる程の大寺となりました。

天台領や百済寺領から納入される米は多量で平地に米倉を作って貯えました。木曽義仲が平家追討のために木曽から近江を通過するとき兵糧米として五百石の米を贈ったと源平盛衰記に記されています。

織田信長が近江平定のために佐々木氏と争ったとき百済寺は佐々木氏に味方したために信長によって百済寺は焼き討ちされました。此の時百済寺の寺院僧坊、その他佛像や多数の文化財が焼失しました。更に信長は百済寺領の水田を取上げて武士の領分としました。山地だけは寺領として残されました。

此の後百済寺は衰微して僧も四散しましたが、江戸時代に現本堂が再建されるまで一山焼跡でした。

慶安３年に井伊氏甲良豊後守の寄附によって今の形を整えるようになりました。百済寺は次の３期に分別されます。

１．創建から天台宗百済寺まで
２．天台宗百済寺誕生から信長の焼き討ちまで
３．信長の焼き討ちから現在まで

《百済寺の文化財》

１．創建から天台宗百済寺まで

この間のものはほとんど残っていない。おそらく信長の焼き討ち時に焼失したものが多かったと思われる。

○金銅弥勒菩薩半跏思惟像

この像が白鳳期のものか、後に模造されたものか明らかではありません。しかし百済寺がくだら寺と呼ばれた時代のものではないかと思われます。この27糎の小さな像は大正14年から昭和４年の間に、愛智郡志を編集された中川氏によって寺域の竹やぶの中で発見されました。発見された場所は旧くだら寺の本堂があったと推定される地域でした。文部省の調査記によると

「鉱金は落ち表面は焼け肌となり、荒れているが古様をもった小金銅像である。総高27センチ、左足先から宝篋まで23.4糎である。八角形の髻座に左足を垂し、右足は足指がわずかに左股にかかるようにまげている。一度鋳造に失敗したらしく上半身と下半身を正面と背面ともに２つずつのちぎり柄をうめこんで接続している。」このように記されている。わずか27糎の像は人が持歩くことも容易で、あるいは百済國から渡来した人々の持佛であったのか？又は僧道欣の持佛であったのではなかろうかと思われています。信長の焼き討ちは百済寺の多数の寺宝や佛像を焼きつくし、又他所へ避難して極少数のものが残されましたが、この小像は寺院の焼跡から発見された唯一の文化財です。

金銅弥勒菩薩半跏思惟像　百済寺蔵

２．天台宗百済寺時代信長焼き討ちまでの文化財

この時代は百済寺の最盛期で経済的にも豊かな時代で、壮大な寺院、佛像、工芸品などが盛んに造られました。

○本尊十一面観音像

この像は「くだら寺」から百済寺になった時に作られた総高２歩58糎の大像であります。現在も百済寺の本尊として植木観世音と呼ばれています。くだら寺創建当時の杉の大木を佛と崇めた時の寺伝をそのままに受けついで植木という名を観音菩薩の上につけたのだろうと思われます。平安中期の作であろうと思われます。当時の愛知郡の依智秦氏の手によって郡の富を投じて作られた大像です。信長焼き討ちの時に山をこえて８粁山奥の不動堂へ避難した時一部損傷して江戸時代に修

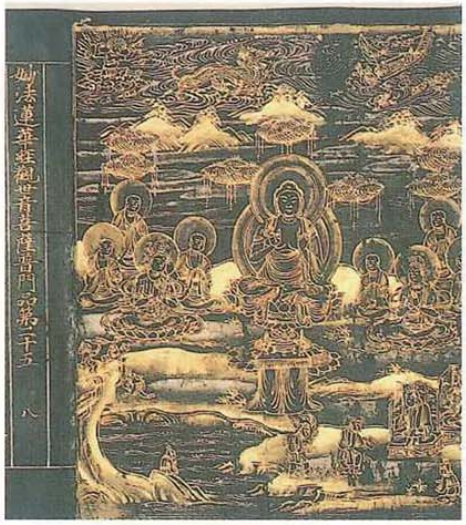
復しています。現在秘佛として本堂の中央奥に置かれています。30年に一度開帳するならわしになっています。

○絹本着色日吉山王神像（重要文化財）

浄土曼荼羅様式によって、社域の景観を大和絵風に取入れ、山王21社の内上７社を本地仏形をもって、社殿の配置になぞらえ、12神を配して合せて21社の全神像を現している。日本でも屈指の山王曼荼羅であると思われます。天台宗百済寺発足時のものだと思われます。

絹本着色日吉山王神像 一幅 重要文化財 百済寺蔵

○紺紙金泥妙法蓮華経（８巻）平安時代



紺紙金泥妙法蓮華経（８巻） 百済寺蔵

○紺紙金泥妙法蓮華経入黒漆蒔絵函一合（重要文化財）室町時代

この２つの経文は百済寺の寺宝であったために信長の焼き討ちの時にも本尊と共に避難したものです。

紺紙金泥妙法蓮華経入黒漆蒔絵函 一合 重要文化財 百済寺蔵

○聖観音と如意輪観音二像

明応７年（1498）大火で多数の堂や経文を焼失した供養の為に本尊十一面観音の脇侍佛として、百済寺第一の院主圓信によって明応７年と仝８年に造られました。信長兵火の時に本尊と共に避難して無事に残されたものです。

３．信長の焼き討ち後の文化財

○黒白馬の絵馬

信長の兵火の後天正12年佐和山城主堀久太郎によって假本堂が建立されて本尊が供養されることになりました。この黒白の二枚の絵馬は門前下山本の一庶民によって奉納されたものです。百済寺郷に住む人々は百済寺は水を祈り豊作を祈る私達の仏さまだと先祖から言い伝えられた言葉を信じていました。黒馬は雨乞いの祈りで白馬は太陽の熱と光を願う古い時代「くだら寺」時代の素朴な祈り姿を表した絵馬だと思われます。くだら寺創建の時代の人々の祈りを伝えた絵馬だと思います。

○鈸子　銅鑼　建長８年丙辰８月日刻銘

彦根寺銘

○石曳図絵馬

この３点は慶安３年百済寺再興の時井伊氏から百済寺に寄贈せられたものであると思われます。彦根寺は現彦根城の彦根山にあって廃寺となりました。その寺の鈸子と銅鑼がこの寺へ移されたと思われます。この２つはお経を唱える時に使われる楽器です。

絵馬　石曳の図　一額　百済寺蔵

○孔雀文銅馨　野洲郡福林寺　金剛寺院

応永廿五年戊戌正月吉銘

○紙本着色三十六歌仙屏風　桃山時代

○絹本着色黄不動図

４．百済寺から他に移った文化財

○大般若経600巻

百済寺東谷無量寿院に於て僧隆昭願主として1089年寛治３年に完成されました。立派な字で一字一字書写されて600巻を作り上げた立派なものです。百済寺で使われている間の出来事が奥書に書き加えられています。現在は高島郡安曇川町北船木の若宮神社のお経になっています。

○釈迦如来像（湖東町横溝善明寺）

この像の胎内に当時の郡内の豪族依智秦氏12人、上野毛氏、守部氏、大中臣氏、藤井氏、安部氏、清原氏、紀氏、平群氏、その他僧名48名の氏名が記されています。長承２年（1133）に御衣木を作り、完成したものです。百済寺の山号が釈迦山ですから百済寺の佛像として造られたが、信長の兵火の時に移されたと思われます。この他にも近くの寺に移されたと思われる佛像が何点か見られます。

５．広大な寺域と城塞化跡

文化財ではなく文化遺跡であるが、百済寺の中で過去の歴史を語るのは広大な境内とその背後にある70町歩の山林であると思われます。寺の境内は本堂を中心として東西南北の四谷に別れています。参道を登ると右に東谷、その右に南谷がありました。左側には西谷と北谷があります。東谷には学僧が多く居住し、西谷には百済寺の長老の僧が居住するようになりました。南谷と北谷には学生方と呼ばれる僧兵の方々が住む僧坊が多くありました。この四谷の中に居住跡と認められる場所は佛殿跡などが調査されて、東谷59ヶ所西谷67箇所南谷62ヶ所北谷51ヶ所、計239ヶ所が確認されています。百済寺が三百坊と呼ばれた時代の跡で中には大がめが並んで埋められた何かの工房の跡もあります。

応仁の乱の後近江にも各所に戦がはじまって百済寺も全焼しました。その後佐々木氏の後援をうけて百済寺の要塞造りが始まりました。指導者は佐々木氏の重臣進藤山城守（守山市木浜城主）でした。

百済寺の参道に大手要塞として総門の左右に堀を掘ってその内側に土塁を作りました。参道の左右に高い石積みの土塁を作って敵を防ぐ要害化をしました。南谷と北谷に要塞を作って中央の本堂を護る計画がなされました。門前下山本の入口に城舘をつくり進藤氏の舘としています。谷川や土地の起伏を利用した百済寺の城作りは大きな山城として完成しました。佐々木氏は百済寺の北に北坂城という見張場を山頂につくり井関氏をその任に当たらせました。又、寺の背後大萩城をつくり村山氏を置きました。

（挿図はいづれも百済寺蔵）

滋賀文化財教室シリーズ　No.199号
発行年月日　2001年12月10日
編集・発行　財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525